

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530562

研究課題名（和文）戦争体験を語りつぐ実践と継承される表象についての社会学的研究

研究課題名（英文）SOCIOLOGICAL RESEARCH ON THE ACTIVITIES OF CONVEYING THE PEOPLE'S WAR EXPERIENCES AND THE REPRESENTATION OF THEM

研究代表者

桜井 厚（SAKURAI ATSUSHI）

立教大学・社会学部・教授

研究者番号：80153948

研究成果の概要（和文）：

本研究は、どのように戦争体験が語りつがれているのか、その語りつぐ実践、語りつがれ方、語りつがれる内容の変異などをあきらかにするものである。沖縄戦を経験し多くの犠牲者を出した南風原町を主な調査地にして、陸軍病院壕の平和ガイドや町文化センター職員などの実践や語りから、語りつぐ実践の諸相と語りつぐための工夫、そしてモノによる語りつぐ活動の意義をあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：

Our aim with this study was to explore the way of storytelling and conveying war experiences through the narrative life story of people who are the peace guides. In Haebaru where so much population were died at the battle of Okinawa, we did research in the narratives of the guides showing into the trench of Okinawa Army Hospital and found out some features and the significances of the activities conveying war experiences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：ライフストーリー

1. 研究開始当初の背景

体験者が高齢化し当事者の語りが直接聞こえなくなりつつある現状への緊急性もあって、歴史的な記憶と語りを受け継ごうとする試みがますます重要になりつつある。本研究の主題は、そうした活動の具体的な実践内容を、そこに集い体験者の記憶と語りを受けつごうとしている、とりわけ若い担い手世代

の実践的な活動と考え方の調査を通して、何が受け継がれ何が受け継がれないのか、という記憶や語りの変容の過程を把握することである。

2. 研究の目的

本研究は、特に戦時を基軸にその前後を含めた歴史的出来事を体験した人びとの語り

やモノを収集・保存し、現世代のためだけでなく次の世代や時代に受け継いでいこうとする人びとの実践に焦点を当て、その活動とともに活動の担い手がどのように受けとめ表象しようとしているのかを調査することで、90年代以降捉えにくくなっている「現在」を生きる人びとの歴史意識や、実践の社会的意義を解明することを目的としている。本研究では、住民を巻き込んだ地上戦がおこなわれた沖縄をフィールドに、その戦争の体験を語りつごうとする平和ガイドの実践に焦点をあてている。沖縄というローカルな文脈に位置づけて捉えることで語りつぐ実践の諸相をより生きられたかたちで浮かび上がらせることで、沖縄から戦後日本社会を照らし返すことを目指す。

3. 研究の方法

沖縄での平和ガイド、とくに南風原町におけるライフストーリー調査を重点に他地域の戦争体験者へのライフストーリー・インタビューならびに関連する文献・史資料などの収集をおこなった。対象は以下である。

(1) 精力的に地域住民の戦争体験を聞き取り、戦争にまつわる様々な資料を記録保存し、また陸軍病院壕の保存をしている「南風原文化センター」の職員の人たちとその壕の平和ガイド。(2) 修学旅行生を対象に、戦跡を案内する沖縄国際大学のサークル・メンバーおよび自治体管轄／民間のガンマ戦跡ガイドの団体に所属するなりして、主に本土からの修学旅行生を相手に案内をしている一般の平和ガイド。(3) 上記の(1)(2)の調査対象と比較する視点から①同じ沖縄における「ひめゆり平和祈念資料館」の新しい試みである「説明員」の活動と担い手についてインタビュー調査、②千葉県佐倉市での戦争体験者、とくに兵士として戦争体験をした高齢者が、戦後生まれの人にどのように語るか、その語り方の分析。

4. 研究成果

はじめに

沖縄で、具体的にどのように体験が語られ、かつ伝えられているのだろうか。以下、三つの章にわけて報告する。本研究成果では、沖縄戦で司令部機能がおかれ陸軍病院壕があった南風原町の語りつぐ活動に焦点をあて、その具体的な活動状況と語りの質を検討している。まず、以下に、南風原町の概要と町の戦争および戦跡との関連について説明し、そのうえで、報告として、(1)平和ガイドをとおして戦後生まれの当事者が語りつぐことをどの

ように理解し、伝えようとしているかの語り方について、(2)では南風原町の平和ガイドの実践に最初から関わり、NPO化まで進めた特定の人物F mさんの語りをもとに、活動の実態と平和ガイドの意義について、(3)では、文化センターの戦跡考古学の考え方を中心にモノをとおして継承する側面に焦点をあてて報告する。

南風原町の概要と南風原陸軍病院壕

南風原町は県の内陸部に位置し、沖縄県では唯一海がない行政区である。那覇、首里の南に位置し、戦前から交通の要衝であった。戦前には軽便鉄道的那覇・与那原線(T3)や那覇・糸満線(T12)が通っていた。この地理的位置によって沖縄戦南部への避難路となり、町内で多くの犠牲者がでた。戦争を語りつぐ意思是、沖縄戦で多くの犠牲者を出したことや陸軍病院壕の存在などから強く、沖縄県の市町村で初めて1982年に「非核宣言」をした町としても知られている。

日本軍の第32軍は、津嘉山に司令部機能の一部をおいていた。「十・十空襲」後、病院部隊、防疫給水部隊、野戦貨物廠・兵器廠の各部隊や戦闘部隊が配備され慰安所もあった。沖縄陸軍病院は1944年6月那覇で編成され、「十・十空襲」の日の夜、南風原国民学校校舎へ移動、米軍の艦砲射撃がはじまった1945年3月下旬には、黄金森(くがにむい)や兼城の丘の各壕に移った。約30本の壕が掘られ、そのひとつが陸軍病院壕20号だ。沖縄師範学校女子部と沖縄第一高等女学校の女学生は2月15日から看護実施訓練、米軍空襲のはじまった3月23日、女学生222人、教師18人が動員(ひめゆり部隊の誕生)された。米軍の南下にともない、5月20日、南部撤退の命令が出、25日までに撤退を完了した。結局、6月19日に陸軍病院解散命令が出て、まもなく沖縄戦は終わった。

1990年、南風原町は陸軍病院20号壕を町の「戦跡文化財」に指定した。戦跡を文化財指定した地方自治体は全国初であった。その後、1996年に「南風原陸軍病院壕の保存・活用」の答申がなされ、以後、病院壕の位置確認、20号壕の考古学的手法の発掘調査(戦跡考古学)、試掘調査などがおこなわれている。2007年6月17日から陸軍病院の20号壕が公開される運びとなった。平和ガイドは陸軍病院壕の公開にともなって養成された。

(1) 戦争体験を語りつぐ——沖縄県南風原町の実践から

① 語り伝える活動

南風原町で戦争体験を語りつぐ活動のなか

で注目されるのは、各字の戦災実態調査である。当時、高校教員だった吉浜忍氏の指導によって地元の高校生、青年による字ごとの各家の訪問、聞き取り調査がおこなわれた。1983年-1996年に12部落すべてでおこなわれた。この調査は沖縄タイムス出版文化賞を受賞。古賀徳子さん（当時、南風原文化センター勤務）によると、町民は協力的で調査拒否はほとんどなく、高齢のために子どもが心配して聞き取りを止めた例があるだけだった。「息子さんが出てきて、『いや、うちのおばあちゃんにこんな話させたら、もう夜も眠れなくなって。あとですと不安になるんだから止めてくれて』、（調査拒否は）他は全然ないですね。堰を切ったように語る方が多くてですね。最初は、こんなだったよって言って楽しい感じですよ。そして戦中の話になったときに、やっぱり、わーっと止まらなくて、いっぱい涙を浮かべる方もいますし、あのう、もう、こんなのは思い出したくなかったって言われたこともあったけど、いや、やっぱりむしろ話を聞いてくれてよかった、ありがたいっていうことが多かったですよ。」

この調査は、調査員自身が地域に住むお年寄りに聞くことで戦争体験を身近に感じることができ、次世代への沖縄戦の継承につながるものになった。だが、高齢者は少なくなるから語りの収集はしだいにむずかしくなる。したがって、吉浜氏はモノを通して戦争を語ることがこれからの沖縄戦学習の課題となるという（吉浜ほか：2010:81）。2007年の陸軍病院壕の公開もそうしたパースペクティブの一環である。遺骨収集は、1972年に厚生省（現、厚生労働省）によっておこなわれ、その後も町によって続けられた。当時は、記録、保存の発想がなかった。この反省から遺骨がどのような状態で発見されたのかの全体を記録保存する「戦跡考古学」の考え方が導入された。詳細については、本報告の(3)でふれる。

南風原文化センターを中心とする戦争体験を語りつぐ活動には、陸軍病院壕の平和ガイドのほかに次の三つがある。ひとつは、文化センター内の「常設展示」。二つ目は「町民劇場」、三つ目は「子ども平和学習」。なかでも、「子ども平和学習」は、毎年、小学6年生8人を対象に、沖縄戦、ヒロシマ、人権、差別などを、現地訪問して学習している。

陸軍病院20号壕の一般公開に向けて平和ガイド養成講座が、2006年度、2007年度に開催された。第1回は、20名募集に町外も含め60名の応募があったため、結局、60名全員を対象に実施し50名が修了証を受けた。2007年4月に「南風原平和ガイドの会」が発足し、2009

年9月にはNPO法人化された。この経緯とその後については本報告の(2)で詳細を報告する。

②非体験者による語りつき

平和ガイド養成講座を企画、担当してきた文化センター・スタッフの平良次子さんが、非体験者が語りつぐことの可能性を、次のように語っている。（トランスクリプト内で、*は聞き手。以下同じ）

「あんたたちにはわからないよ、もう、体験した人たちにしかわからないとおっしゃる方もいますけど、その体験した人、が、その人自身が、いや、私たちが知っているのは目の前のことだけであって、その同じ時期に、あのう、沖縄の別のところではどういうことがあった、上ではどういう動きがあったかかっていうことはわからないわけだから、あのう、それを勉強してすることができるあなたたちの方が、もっと広く、あのう、戦争のことわかるからそれをがんばりなさいっていう方もいるわけですね。やっぱり、体験していない人が何も伝えられないのではなくて、何らかの形で表現することで伝える方法、いくらでもあるので、いろんな方法があっというんじゃないか。」

文化センターで平和活動のイベントを精力的に推進している学芸員、平良次子さんは、地元の体験者の語りを根拠に非体験者が語りつぐ可能性を語る。体験者自身は、経験としては自分の体験を通してしか見えていないが、非体験者は、むしろ大状況を踏まえているという点では非体験者の語りの優位性を指摘する。「どうして戦争体験してないのに、戦争のこと話しているんですか」という学生の質問に、平良さんは「自分の周りには体験者がいて、あのその人たちの今は、その強烈な体験があって、あの、何か秘めているっていうか、もっているものが、苦しいものも悲しいものも、負い目も、みんなもっている人たちが今すぐ傍らで一緒に生活しているのに、その人たちともっと深くもつといい付き合いをしようとするなら、その人たちのその部分をしらないといけないと思うから」戦争体験を語りつぐことはなにも特別なことではなく、生活の中で人びとを理解することと同等なことなのである。

語りつぐためには、語り方の操作がおこなわれる。手法のひとつは、物語構築の枠組みとなるオリエンテーションを「あのとき・あそこ」から「いま・ここ」へと変換することである。それは物語を「語り手」の世界から「語り手と聞き手の対話」の世界へ移行することである。まず時間の変換はどのようになされるだろうか。まず、戦争体験は身近な現

在のことで気づくことである。「ずっと、自分もそう、世代から世代へと思ってたんですけど、そうじゃなくて今いる人たちのことを知るためには、今できるんだな、って気がした。去年、ほんとにハッと思って」、そして「子どもたちにはたくさん年寄りに会わせる方がいい」と平良さんは気づいたのであった。

空間の変換については、前文化センター館長大城さんの言葉が参考になる。大城さんは、南風原中生徒をガイドしながら「(黄金森には) たくさんの骸骨が転がっていて、骸骨山と呼ばれていた。子どものころは、骸骨と遊んだりもした」(『琉球新報』2009年6月6日)と語りかけることで、いまの場所を過去の戦争の犠牲者と結びつける。また、南風原平和ガイドの会の黄金森周辺の戦跡巡りで「ここは南風原で一番早く緑豊かになった。たくさんの日本兵の血肉で育ったのだろう。この大きなグワバの実は空腹を紛らわせた」(同、2009年6月25日)とも語る。平良さんもそうした操作をする。「南風原町は、あなたの今歩いている道は、遺骨も不発弾も埋まっていますよって。えーっ！って(笑)」。遠い過去の現実を現在の場所に変換するのである。

③ガイドになる、ガイドであること

平和ガイドはどのように語るか。語り手がガイドとしての自己をいかに定義するかは、インタビュアーの質問/応答を離れて考えられない。どのように一貫した物語(アイデンティティ)をつくるか、を以下の3人の語りから読む。

(i)「まずは自分が知りたい」：Kさんは50代の女性である。南風原町に生まれ、結婚後も南風原町在住。平和ガイド養成講座の1期生である。琉球舞踊の免許をもち、NPO法人「南風原平和ガイドの会」の役員である。「(平和ガイドに) 関わって、初めて沖縄戦ってたいへんだったんだあってというようなことを、恥ずかしながら、ハハ、わかったような状況ですね。(家族との会話でも) 自分の無知さを感じますし。(子どもに) 高校生がいるんですけども、総合学習迎いでかなり勉強しているようで、『え？おかあさんはそんぐらい知らないの』(笑)って言われたりします」。では、誰に伝えたいのだろう。そんな問いかけに、Kさんは「あのお～私が学びたいというのは、その、現実を、沖縄戦そのもの(・)を知りたいわけなんです。で、やっているうちにやっぱり命の大切さ(・・・)伝えていくべきだって強く思いますけどね」。体験者じゃなくても「伝えられるっていうような思いは強いんです」と語るが、その理由は語ら

れなかった。

(ii)「うちな一意識」：Aさんは50代の男性である。サラリーマンを辞めて漆喰シーサー職人に転職。沖縄県観光ボランティア友の会、南風原平和ガイド、平和ネットワークなどに所属し、各地で平和ガイドをしている。南風原平和ガイド養成講座の1期生である。Aさんが自らの役割を自覚させられたのは、なによりも自分の身近な親戚が当時の日本軍兵士と特別な関係にあったとわかってからである。

「すごいショックな部分があったんですよ。おふくろが座間味の阿真集落出身で、親戚の家が残っているんですよ。夏休みになると親戚の家に遊びに行ったりなんかしてたんですよ。あとからわかったんですけども、村史とかそういうの読んでみると、遊びに行っただけで泊まった家が、じつは慰安所で使われていたんだってことがわかって」、「ここ3、4年の間にはじめて知って、そこからやっぱり平和ガイドとしてはきちんと伝えていかないといけないなっていう、もうそれはある使命感っていうか」。母は息子には、「話をそらして」伝えなかったのである。

陸軍病院壕のガイドの養成から始まった南風原町平和ガイドは、町内の産業や観光振興とあいまって「総合ガイド」へと形を変えようとしている。これについて、沖縄市に住むAさんは、明確に異論を唱える。「地域おこしだったら、私は自分のところをね、沖縄市の部分をやりますよ。だから、私は平和ガイドだけしかしませんよっていう、この20号を中心とした平和ガイドしかしませんよっていう感じの話はずっと言って」。ガイドをするのは、Aさんなりのこだわりや主張があるのだ。そして、さらに続ける。「平和ガイド以前に、やっぱり『うちな一意識』の部分が根本なんじゃないかなーという感じと。沖縄に対するこだわり。ウチナンチュというアイデンティティなんですよ。「アイデンティティをきちんともちながら」主張したい、という思いだ。

(iii)「自分が住んでいるところを知ることが大切」：Oさんは南風原町生まれの高校3年生。小学6年で「子ども平和学習」に参加、現在、壕のガイドを担当する。ガイド養成講座の4期生である。ガイド養成講座を受講した動機は、「先生に声かけられて、まあ、なんとなくやってみようかなーって思ってやったんですけど、あのおばあちゃん、今おばあちゃんと一緒に住んで、おばあちゃんが体験者なんですよ、戦争の。それで、ずっと自分が興味あって、よく聞いてたんですね、

おばあちゃんから。だから、勉強してみようかなと思って参加しました。「(おばあちゃん)ほんとは、思い出したくないさあ〜とか言ってるんですけど、黄金森の一部に住んでいるみたいな感じなので、おうちがすぐ近くなのでなんですよ。自分が住んでいるところを知るとはやっぱり大切だと思う。「親は応援してくれています。今日も、ガイドも、がんばってこいよ、みたいな」。父は平和活動に熱心で「県民大会」や「人間の鎖」などの運動にも参加、現在、町議を務める。「お父さんにけっこう影響受けてる？」と問うと即座に「かもしれないですね」と笑った。

④平和ガイドへの関わり方

平和ガイドの実践がどのような意味を持つか、について、きわめて個人的な動機を語る人から地域のコミュニティとの集合的な価値や国や制度との関わりで語るなど、いくつか語りのモードがある。上記の三人の語りのモードは以下のとおり。

(i) Kさん：パーソナル・モード(自己)：なによりも戦争や平和を自己の「知識」の獲得と結びつけている。(ii) Aさん：制度的モード(自己と全体社会)：身近な経験にもふれながら、「慰安所」というナショナルな語りへの関心、「沖縄のエスニック・アイデンティティ」の問題を強調している。(iii) Oさん：パーソナル・モードと集合的モード(自己とコミュニティ)：南風原町の平和学習の申し子といってよい。家族、学校、文化センターの影響を認めている点では集合的モードの語り方も利用しながら、祖母の沈黙に対する強い関心や両親からの「影響」を「応援」と語ることによって、あくまでも自己の「自律性」を強調していることが特徴である。

(2)「南風原平和ガイドの会」の実践

「南風原平和ガイドの会」(以下「ガイドの会」とする)は、2007年4月に南風原陸軍病院20号壕(以下「20号壕」とする)の管理・運営のために結成された。2009年5月にNPO法人化してからは20号壕だけでなく町内全体にガイドの範囲を広げ、字ごとのマップ作りや「総合ガイド」の養成など新たな事業に取り組んでいる。「総合ガイド」とは「平和学習と共に他府県と異なった民族、文化、産業、史跡を案内する事業」であり、その目的は「町内の住民と連携し、展開して地域経済活性化と住民参加のまちづくりの推進に寄与する」ことにある。ガイドの会は20号壕を通して沖縄戦を語り継ごうと精力的に活動してきたが、「まちづくり」という視点を取り入れることにはどのような意味が

あるのだろうか。ここではガイドの会の中核メンバーであるFmさんの語りから明らかにする。

Fmさんが力を込めて語っていたことの1つは、南風原町に住んでいる人々が関心を持たなければガイドの会は維持できないということだった。ガイドの会には町外の人も参加しており、第1期ガイド養成講座60名のうち町外在住者は2/3を占めた。第2期は町民に対象を限定したので「町内がだいぶ増え」たけれども、「やっぱり町外の人なしでは」運営はままならないという。実際「いろんなことを動いている人間の半数以上はね、ここで生まれ育った人」ではない。だが、「町が出すお手当ってというのは、ほんとに微々たるもの」であり、わざわざバスを利用して来てくれる町外の人に対しては「申し訳ないと思ってる」そうだ。こうした人々に「ぶら下がってしまっただけ」いけないのだ。

南風原町全体をガイドするという「総合ガイド」の方針を打ち出したことには、ガイドの会を運営・維持するための経済的基盤をいかに確保するのかがということが深く関わっている。そこで出てきたのが「町を巻き込む」という発想であり、その手始めとして着手したのが字ごとのガイドマップ作りだった。

このようにガイドの会の運営・存続のための経済的基盤を確保するための方策の1つが、ガイドの範囲を20号壕から南風原町全体にガイドの範囲を広げること、すなわち「平和ガイド」から「総合ガイド」への転換だった。Fmさんは「平和ガイド」と「総合ガイド」の関係を、連続してはいるものの、後者はあくまで「町の人たちを軸に」したものであり、「町の人に関わる」ことが何より重要である。この重要性はFmさん自身の平和観との関わりで理解できる。Fmさんは語る。「戦争がないだけが平和じゃない」。平和とは「皆が仲良くすること」である。ガイドの会をはじめ様々な活動に取り組み、戦争のことも含めて様々なことを語り合えること自体が「平和」なのだ。したがって、そういつたことができる「雰囲気」や「人間関係」を作っていくことは、まさに平和をつくっていくことにほかならない。「全然関心のない人たちと連携して行って、お互いを」分かってくことは、「おっきな意味での平和にもつながる」ということだ。

(3)モノを通して戦争体験を継承する方法

南風原町の戦跡の取り組みにおける二つの重要な点がある。一つ目は、町が文化財に戦跡を指定したことである。国は1995年に

文化財の基準を改定し戦跡を文化財として指定するようになったが、それ以前は「100年」に満たないものを一律に指定されなかった。南風原町はそのような国の意向とは別に、町独自の条例を作成し「沖縄戦に関する遺跡」を文化財の史跡項目に追加したのである。町の歴史を語るうえで戦争は欠かせないものであり、その痕跡として戦跡を残すことは何より南風原町の未来を担う後世にとって有意義なこととして捉えられたからである。二つ目として特記すべきことは、見学者が壕の中を通りぬけられるように壕を整備したことである。「壕の中を通すことに意義がある」という金城義夫町長の「英断」により、新たな整備として原形を可能な限り維持し、「再現・復元・原形」の三つの手法を駆使するというものである。戦時当時の壕の状態を可能な限り維持させることで見学者が戦時の状況を追体験できるようにしたのである。こうして町行政が戦跡の重要性を認識しその保存活用の主導的役割を果たしていくこと、そして現代の人びとが戦争当時の状況を想像可能になるように、できるだけ原形に近い状態での保存に努めることが、南風原町の戦跡の取り組みでは重要になっている。

「原形」の状態での保存・公開することの理由について、学芸員の上地克哉さんは、その遺骨収集の作業それ自体の重要性を認識するとともに、遺骨の埋められ方／置かれ方を重視する。文字通り遺骨を単に収集するのではなく、遺骨がどのような状況（身体の向きや他の遺骨や遺品との配置関係など）にあったかを厳密に調査し記録することが必要不可欠なのである。考古学の観点から埋葬のされ方を適切に把握することが、その人物の最期を明らかにする。そして遺骨が発見された場所から戦局の更なる解明や新たな史実の発見にもつながる。つまり、適切な方法に倣うことで遺骨が歴史的な資料としての価値を持ちうるというものだ。この考え方は遺品に対しても当てはまる。見学者、特にかつての戦争を体験していない人びとが沖縄戦に向き合うには何より戦時当時の状況そのままの再現が必要であるということだ。上地さんは、若者や後世の人々に戦跡を通して「戦争、平和、いのち」について学んでほしいと語る。南風原文化センターの戦跡への取り組みは、一つに歴史的な資料として価値があることを証明していく作業であるといえる。

引用文献：吉浜忍・大城和喜・池田榮史・上地克哉・古賀徳子、2010、『戦争遺跡文化財指定全国第1号 沖縄陸軍病院南風原壕』高

文研

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ①桜井厚、問題経験の語りがたさ、あるいは沈黙、社会学論叢 (日本大学社会学会)、査読無、第172号、2011、1-22
- ②桜井厚、「事実」から「対話」へーオーラル・ヒストリーの現在、思想、査読無、No. 1036、2010、235-254
- ③桜井厚、ライフストーリーの時間と空間、社会学評論、査読有、60(4)、2009、481-499
- ④桜井厚、〈体験〉と〈経験〉の語りー沖縄戦のオーラル・ヒストリーから、日本オーラル・ヒストリー研究、査読有、第5号、2009、73-97

[学会発表] (計4件)

- ①桜井厚、戦争体験を語りつぐー沖縄県南風原町の実践から、日本オーラル・ヒストリー学会第9回大会、2011年9月10日、松山大学
- ②石川良子、南風原平和ガイドの会の実践、日本オーラル・ヒストリー学会第9回大会、2011年9月10日、松山大学
- ③八木良広、沖縄戦の「死」の語り伝え、日本オーラル・ヒストリー学会第9回大会、2011年9月10日、松山大学
- ④張嵐・桜井厚、戦争体験を語る・伝えるという実践、日本オーラル・ヒストリー学会第9回大会、2011年9月10日、松山大学

[その他]

ホームページ：日本の経験を語る

(<http://lifestoryinterview.net/wordpress/>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

桜井 厚 (SAKURAI ATSUSHI)
立教大学・社会学部・教授
研究者番号：80153948

(2) 研究協力者

石川 良子 (ISHIKAWA RYOKO)
立教大学兼任講師
八木 良広 (YAGI YOSHIHIRO)
武蔵大学非常勤講師